

昭和59年度 名古屋大学教育学部臨床心理相談室活動報告

I はじめに

昭和59年度の当相談室は34名のメンバーにより心理臨床実践、研究、運営がなされた。その構成は(1)臨床心理学系教官3名(教授1, 助教授1, 助手1), (2)非常勤講師2名, (3)臨床心理学専攻大学院生7名(前期課程5, 後期課程2), (4)大学院研究生3名, (5)学部研究生6名, (6)常勤職員(インターカー)1名, (7)「スーパーバイザー」3名, (8)その他(内地留学生)1名, (9)準スタッフ(学部4年次)8名である。なお、非常勤講師であった藤山助教授が10月より併任となった。

昭和59年度の相談室長は池田であり、相談室の特別施設化に向けて、昨年と同様に相談室の諸機能の充実に目標がおかれた。つまり、①院生を中核とした「教育・訓練」の実践活動、②「研究」機能、③「地域サービス」としての実践活動の三本柱の機能を一層充実させることであった。そうした努力が実り、年度末には当相談室の特別施設化の実現性が高くなり、料金徴収にかかわる事務的な検討はなおのこと、心理臨床家としてのあり方について治療会議のたびにつつこんだ討論が重ねられた。

新入メンバーのための「臨床入門講義」は本年度より正式な授業科目「臨床心理学特殊講義—心理臨床入門—

として新スタッフおよび、準スタッフを対象に4月から10月までの前期半年間に開講された。テキストには、鐘・名島編『心理臨床家の手引』(誠信書房, 1983), 村上・池田・渡辺編『心理臨床家—病院臨床の実践—』(誠信書房, 1982), 村上英治監修『生きること・かかわること』(名大出版会, 1984)が用いられた。本年度は「生きること・かかわること」の著者である当相談室の先輩を招き、著書中の事例についてのみならず臨床家としての「人となり」を伝えてもらった。この企画は『大学の相談室における臨床とは一味ちがった臨床の場におけるなまの話しを聞いた』と受講生の評価は高く、次年度においてもこのような企画を考えていきたいと思う。

II 昭和59年度の新規ケース受理状況

昭和59年度の新規受理件数は79ケースであった。約80ケースの新規受理は過去5年間に於いて定着してきた。本年度の新規受理ケースの年齢、性別は表1に示した通りである。本年の傾向は最近4年間とはことなり、小学生までのケースが青年期以降ケースをうわまわったことである。過去4年間はほぼ70%が青年期以降ケースであったが、本年は44.3%(35ケース)であった。

月別の受付状況、主訴の内容は、それぞれ表2, 表3

表1 59年度新規受理件数

性別	就学前		小学生		中学生	高校生	大学生	成人	計 (%)
	0~3	4~6	低学年 7~9	高学年 10~12					
男	4	10	3	6	4	8	1	2	38 (48.1)
女	3	3	9	6	3	4	2	11	41 (51.9)
計	7	13	12	12	7	12	3	13	79 (100)
%	8.9	16.5	15.2	15.2	8.9	15.2	3.8	16.5	
計 (%)	44 (55.7)				35 (44.3)				

() 内%

表2 59年度月別受付状況

月	59年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	60年 1月	2月	3月	計
件数	2	7	4	13	4	4	7	10	7	6	10	5	79

表3 昭和59年度受付ケースの主訴

登校拒否	17 (21.5%)
神経症・境界例	7 (8.9%)
反社会的行動・非行・怠学	7 (8.9%)
精神発達遅滞・言葉の遅れ	6 (7.6%)
自閉(傾向)児	5 (6.3%)
性・夫婦問題	5 (6.3%)
緘黙・人見知り	5 (6.3%)
チック音	5 (6.3%)
吃音	2 (2.5%)
抜毛	2 (2.5%)
いじめられ	2 (2.5%)
過呼吸発作	1 (1.3%)
無気力	1 (1.3%)
精神病	1 (1.3%)
その他	13 (16.5%)
計	79 (100%)

に示した通りである。

主訴の内容に関してみると、「登校拒否」が最も多く、「神経症・境界例」がつづいていることは近年のパターンと同じである。本年増加した児童ケースの内容では「緘黙」「チック」を中心とする情緒障害ケースが約30%を占めている。したがって、青年期においても、児童期においても神経症水準のケースが中心をなし、幼児・児童における発達障害ケースは減少している。

Ⅲ リサーチ・カンファレンス

59年度のリサーチ・カンファレンスは、計8回行われた。主題と話題提供者の一覧は表4に示されている。昨年度と同様に本年も外から著名な演者の話題提供をうけ、多くの参加者をみたことはうれしい限りであった。しかしながら、現スタッフの発表が少く、研究機能の充実という点からは今後検討すべきことのように思われる。

(村上英治・田畑 治・池田博和・蔭山英順)

表4 昭和59年度リサーチ・カンファレンス主題一覧

	年月日	主 題	所 属	話題提供者
1	昭和59年 4月27日	心理療法家にとっての近接領域 — 児童臨床における神経学と神経心理学 —	みなみ子ども診療所	間宮正幸氏
2	5月25日	エンカウンターグループの一事例研究 — 参加者の視点から —	名古屋大学	森崎康宣氏
3	6月22日	The Psychological Unconscious — A Necessary Assumption for all Psychological Theory? —	ミシガン大学	Howard Shevrin氏
4	7月20日	自我とイメージ — ユング研究所での留学を終えて —	名古屋学院大学	生越達美氏
5	9月21日	自閉症の follow-up 研究	名古屋大学医学部	若林慎一郎氏
6	11月2日	家庭内暴力の幼児期発症事例 — 親の保護機能との関連において —	愛知学泉 女子短期大学	後藤秀爾氏
7	12月21日	原因帰属と動機付け	日本女子大学	宮本美沙子氏
8	昭和60年 1月25日	治療関係における知ること	中京病院	成田善弘氏